

## 第1回東アジア・中央アジア分科会 議事録

日時：2007年7月26日（木）15:00 - 17:00

場所：東京文化財研究所 第一会議室（地階）

出席者：青木、飯島、高濱、西谷、林、宮治、渡辺（以上、東アジア・中央アジア分科会委員）、浅野（以上、文化庁）、関、守山、細川（以上、外務省）、和田（国際交流基金）  
岡田、永井（以上、東京文化財研究所）、清水、豊島、田代、谷口（以上、コンソーシアム事務局）

---

### 1. 委員会運営について

清水真一（文化遺産国際協力センター）

- 文化遺産国際協力コンソーシアムについての説明（資料1）
- 規約に従っての平山会長による東アジア・中央アジア分科会会長代理(司会)の指名
- 青木会長代理からの挨拶
- 各委員による自己紹介

### 2. アジュナ・テパ遺跡の保存に関する現状報告

渡辺邦夫（埼玉大学 教授）

#### 報告の概要

<日本ユネスコ信託基金によるアジュナ・テパ遺跡保存3ヵ年計画の現状と問題>

**アジュナ・テパ遺跡**：タジキスタンの首都から南へ100キロの位置にある7世紀～8世紀の仏教遺跡。ソビエトの考古学者により1960年～1975年に僧院部分を中心にして発掘される。1975年以降、遺跡は放置され、風化している。ソビエトによる発掘時代から現在まで測量された地図は存在しない。

-測量実施について：アジュナ・テパに関する地図がないことから、写真測量により、地図を作成している。写真測量の利点としては、写真画像内任意点の座標計算ができる事である。不可視の箇所については、トータルステーションで測量を実施し付加した。得られた座標データからGISソフトを使って3次元画像と地図を作成した。

-壁の倒壊防止対策：2006年8月と2007年5月に行なわれた写真測量結果の比較から、遺跡の壁が大きく崩壊した事がわかった。写真測量によれば、崩落形状を詳細かつ容易に把握することが可能である。崩落を防ぐためにエンリコ（Dr. Enrico Fodde）氏（イタリア）設計による補強がおこなわれている。補強には付近で製作した新しい日干し煉瓦を使用し

ている。

ー塩類析出による壁の劣化・侵食：塩類析出がおこり、壁の崩壊につながっていると考えられる。蒸発がおこりやすい箇所には、崩壊対策が必要であるので、地圏科学研究センターで開発した蒸発計測センサーで計測をおこなった。対策として、高蒸発量範囲を、日干し煉瓦で地面から1.5mほど覆うことを提案している。

ー遺跡への立ち入り問題：周辺は、フェンスによって区域化されているが、フェンスを壊して、遺跡内に人や牛がはいつてくることがある。これらを防ぐためにも、近隣住民の人々への教育が重要であると考えている。

ー今後認識されうるストウーパ部分のオリジナルな面を保護するために、シェルターのデザインと保護工の設計を提案している。また、フェンス内外の景観デザインや、観光客のルート整備なども実施する必要がある、そのプランを早急に作る事を考えている。

## 質疑応答

・壁にできている穴は何なのだろうか。

→ 2つの説があり、柱の穴といわれている。また、鳥などの動物や後世にここに住んでいた人々が柱の穴を拡大したものだともいわれている。

・壁をつくるには、版築作業によるものと、日干し煉瓦によりつくるものと2種類がある。中央アジアは、西の日干し煉瓦による作業と、東の版築技法が交わる場所である。この遺跡では、日干し煉瓦なのか、版築作業によってつくられた壁なのか。

→ 遺跡に残る壁の上部は白くみえる。このあたりは日干し煉瓦でつくられた壁であると考えられる。ソビエトの発掘では、Mud Block もしくは Clay Block と報告されている。版築技法が使われたとの報告はないが、しかし、基礎の部分では版築方法が使われた可能性もある。明らかではない。

・この問題は、修復の問題に関わると思う。この壁が版築のような技法によりつくられた壁であるならば、版築として修復しなければ違和感があるのではないだろうか。

→ 基本的には修復作業には日干し煉瓦だけ使用している。この日干し煉瓦の材料や製作方法については様々な実験をおこなって使用するものを決定した。

・日干し煉瓦を使用したことについては、修復箇所がすぐにわかるように、古い壁土の部分と違いがつかないようにしたのだろうか。

→ そういう考えであって実施している。

- ・このプロジェクトのチーム構成についてはどうなっているのだろうか。
  - タジキスタンの人々が主要メンバーとして実施することが好ましいと考えられている。考古発掘は、科学院が担当しており、ユネスコとの交渉はユネスコ国内委員会、また、文化省がプロジェクト全体を担当している。これら3つの組織からのタジキスタン人に加えて、国際専門家としては、日本から、渡辺（埼玉大学）、山内（東文研）が参加し、カザフスタンの技術者、イタリアからはエンリコ氏が参加している。
  
- ・日干し煉瓦を積むことによって、蒸発を防ぐということだが、かわりにその上部が劣化するのではないだろうか。
  - ストウーパをどう保存するかということについて、もともとその基礎部分を日干し煉瓦によって覆い保護する話があった。しかし、この高さを何メートルにするかという議論があった。そこでひとつの判断基準として塩類析出に着目して1.5mという提案をさせてもらった。新しい日干し煉瓦が劣化することが予想されるが、その目的はオリジナルの面を保存することであるから、この煉瓦が劣化することは仕方がないと考える。また、新しい日干し煉瓦には石灰などを入れて強化することも可能ではないかと思っている。
  
- ・つまり、1.5mに積んだ同じ箇所から蒸発というのは引き続き起こることだろうか。
  - 新しい日干し煉瓦とオリジナルの日干し煉瓦の材質が同じであるならば、新しい日干し煉瓦もまた劣化するものである。タジキスタンの文化省の方に対しては、その可能性を示してメンテナンスを行うように伝えておくべきであると考えている。
  
- ・覆屋については、渡辺先生はどういう役割を担っているのだろうか。
  - やればやるほど、役割は増える。観光ルート整備、景観デザイン、覆屋設計など、やることは多くあるが、それがどこまでやるべきなのかは決定されていない。現在の状況では、少なくとも景観デザインまではすべきだと思っている。
  
- ・ソビエトの発掘では、ストウーパの四方に階段があったと思うが、その階段の現況はどうだろうか。ソビエトはすべての階段を発掘していたのだろうか。
  - ソビエトが発掘した階段は一部であったと思う。現在は、階段部分は土で覆われている。発掘した後に、土をかぶせたようである。
  
- ・涅槃像があったところにアーチがあったと思うのだが、それは現在どうなのか。
  - 涅槃像があった箇所は、ストウーパの横の部分だが、現在は、アーチはなく窪んでいる。

・涅槃像をはじめ、像や壁画が出土していると思うが、それらに関連してサイト・ミュージアムが建設される可能性はあるのか。

→ その計画については聞いている。しかし、それが実行されるかという保障はないと考えている。遺跡は非常に辺境に位置しており、観光客はアクセスしづらい。現在中央アジア・中国が中心になりシルクロード沿いの34遺跡を世界遺産登録にむけての計画がある。そのような大規模な観光開発の一環であるならば、この遺跡も観光開発される可能性がある。しかし、実現には多大な努力が必要と思われる。

・出土遺物の保存状況はどうなっているのか。

→ ほとんど首都ドシャンベの考古学博物館に保存されている。科学院の博物館と文化省の博物館があるが、遺物は現在科学院の方の博物館に保存されている。

・土壁の保存は難しい。しかし、他に目立たないような修復方法が考えられたのではないか。

→ その通りで、今後も検討する必要がある。煉瓦にしても、プラスターにしても、オリジナルの面との接合部分が非常に難しい。修復方法は今後改良していかなければならないのではないかと考えている。

・アジュナ・テパ遺跡というのは、タジキスタン社会のなかでどのような位置づけなのだろうか。例えば、イスラーム社会であるタジキスタンで、このような仏教遺跡の重要性は？

→ イスラーム社会としては、17世紀のモスクの修復の方が優先であると考えられる人もいる。どちらを優先するかという問題は、外国人のみでは決定できるものではなく、タジキスタン政府と十分話して決めるべきものであると考える。

・現地の人々はアジュナ・テパを「遺跡」として認識しているのか。

→ 遺跡としては認識されているが、その価値については、あまり認識されていないのではないと思う。その価値認識のためには、教育が重要であると考えられる。

・日干し煉瓦の専門家は日本にはいないというが、そういう状況なのか。

→ 断定はできないが、日本には施工の経験があまりない。ただ積むだけなら日本でもいるかもしれないが、煉瓦材料特性なども含めて日干し煉瓦について総合的に知識を持っている人は、ほぼいないと思う。

### 3. 中国における文化遺産国際協力

岡田健（文化遺産国際協力センター）

#### 報告の概要

－中国の文化遺産について日本がおこなってきた事例の概観：

1984年（昭和59年）安倍晋太郎外務大臣と中国呉学謙外務大臣との会談において敦煌をふくむ中国の文化遺産保護についての日中協力の基本合意がなされる。1985年には、日中文化交流政府間協議において、日中両国で敦煌文化財に関する調査研究に関する推進が決定された。これにより、東京国立文化財研究所を中心とした調査団が派遣され、敦煌における予備調査が始まる（1986年～）。1990年には東京国立文化財研究所と合意書がかわされ、4期にわたって敦煌において共同研究がなされている。関連して、1988年～91年には中国砂漠地帯の文化財保存のための自然環境調査をおこなっている。1988年頃、文化財保護振興財団が敦煌研究院に対する助成を開始する。このように、対中国の文化財保護に関する象徴的な活動として、敦煌の文化遺産保存活動がある。2000年代に入ってから、様々な人々が中国の文化財保護活動に参加してくる。また、財団などによる助成を受けた大学関係者も増えてきた。

－ユネスコ日本信託基金による龍門石窟保存プロジェクト（2001年開始）がおこなわれ、また、ODAによって博物館などへ機材供与も開始される。

－現在文化遺産国際センターとしては、4つの中国のプロジェクトを実施している。①敦煌壁画の保護に関する敦煌研究院との共同研究。②龍門石窟の保存修復に関する調査研究/龍門石窟の保存修復のための写真情報を活用した記録作成技術の開発と写真管理システムの構築③陝西省唐代陵墓石彫像保存修理事業④日中韓共同によるシルクロード沿線の文化財保護修復技術人員の育成プログラム

－中国の文化遺産保存の現在：①外国人が調査活動をするのが厳しくなっている。2007年春からは国土資源部により、外国人が測量調査をするのが禁止となった。考古学調査を中国でおこなう場合、測量調査ができないことになった。②文物局は2002年に中国人民共和国文物保護法を改定した。この背景には、各地のインフラなどにより文化財が大量に出土している。そして、富裕層が増えていることにより、それら出土品が古美術コレクションの対象となっている事態がある。③世界遺産登録が、地域経済開発のための手段となっており、地域の文物を世界遺産に登録することが地域の「使命」となっている現況がある。④「文物」が文化財に対応する言葉であったが、「世界遺産」「文化遺産」という言葉がはいつてくることにより、新しい「文化遺産」という概念がでてきた。現在「全国重点文物保護単位」というリストがあるが、これとは別に「文化遺産リスト」を作成しつつある。6月の第2土曜日は「文化遺産の日」となり、全国各地で様々な催し物がおこなわれており、文化遺産に対して非常に熱狂的であるといえる。「文化遺産保護基金」というものを設立した地域もある。

—総括：私たちが行うとしている海外の文化遺産を保護しようという活動は、相手国の状況を知らなければできないものである。20年前と現在の中国の状況は劇的に違う。イタリア政府は現在実施している2年間のトレーニングコースの他に、北京オリンピック後は、文化遺産保存トレーニングセンターを設立する予定であるという。これらの活発な文化遺産保護の動きを支えているのは、文化遺産というものが、今もなお増加し、あられ続けているという中国の現実がある。それに対して、中国政府は資金を支出し続けており、また、中国においては現在若い人たちが文化財分野を担っているという背景がある。今後、中国における文化遺産保護についての協力をするとすると、中国における大規模な文化遺産保護のために必要な資金は、中国のほうが豊富な予算をもっているということがあるだろう。そして、また、若い世代が台頭してきている中国では、私たちが経験をもっている、中国側は若い世代を次々に現場にだしてくるという事もある。

では、以上のような状況をうけて、日中共同のあり方を考える時、日本が中国において文化遺産保護活動をしていく必要がないかということ、そうではない。つまり、中国の文化遺産は、私たちにとっても非常に大事なものであるということである。これは、日本の文化や伝統の成り立ちを考える時に、東アジアの文化なしではいられないからである。中国の文化遺産を保護するという事は、日本の文化を知り、日本の文化財をまもるということにつながるのである。

今後は、中国に対する支援という体制ではなく、共同で文化遺産の保護を行う、という体制に変化していてもよいのではないかと考える。そのためにも、共同で人材養成をおこなう必要がある。

・ここでの発表は、東京文化財研究所を中心とした中国における文化遺産保護協力の歴史であったが、ぜひ、先生方からは、他の視点からの中国における文化遺産保護協力の情報をいただければと思う。

・次回の第2回東アジア・中央アジア分科会は、10月頃を予定したい。後日、また日程調整の連絡があると思うが、よろしく願います。

以上